

道標

みちしるべ

2014
Spring
Vol.28



画 磯村 仁穂

巻頭エッセイ

坪田 耕三

02 算数・数学で大切にしたい言葉

授業

03 場面の内容や表現の工夫について
読み深めたことを交流しよう
——『暗やみの向こう側』
福岡 知子

07 『平家物語』による単元の設定
——「扇の的」「敦盛の最期」の
二つの場面を対比した読み
館山 知昭

11 文化祭のクラス発表「映画」の
フライヤーを作ろう
——広告の機能と表現様式を
生かして効果的に書く
荒川 恵美

連載7

15 国語科におけるメディア教育の意義
羽田 潤

連載4(最終回)

20 言葉から考え方を考える
——接続表現は論理の要
鈴木 一史

書写

24 書写学習における原理・原則の理解を図り、
日常化を深める書写教育のあり方
勝部 明美

算数・数学で大切にしたい言葉

国語の冊子には合わないかもしれませんが、算数・数学の学習ではどんな言葉を大切にしたいか、思うままに述べてみたいと思います。

例えば、「1から9までの数字を順に並べて、この数字の間に『+』か『-』の演算記号を入れて、右辺が1になるようにしましょう。」といった問題。小・中学生ならば、少々時間があればできるでしょう。続けて、「では次に、右辺が2になるようにしてみましょう。」と投げかけます。子どもは試行錯誤してがんばります。しかし、いくらやってもできません。「なぜできないのか。」と疑問をもちます。できないならばその理由が言えなければと考えます。学校教育の中ではほとんど「できる」場合ばかりが扱われます。できないこと理由を述べることはあまりしません。しかし、これは大切な思考なのです。偶数と奇数といった視点から見れば、1から9までに奇数が5個。奇数と奇数の和、奇数と奇数の差は必ず偶数になりますが、この場合奇数が奇数個なので、2という偶数は

絶対にできません。こんな説明ができればすばらしい。このように「……ではない。」とか「……以外にはない。」といった表現は論理的説明には欠かせないものです。

また、「正方形」という形に注目すると、これは等辺という立場からは「ひし形」ですし、直角という立場からは「長方形」とも見られます。つまり、正方形はひし形かつ長方形なのです。このようなつなぐ言葉も論理的説明には欠かせません。面積を求めるときに正方形をひし形と見れば、辺の長さを使わずに対角線どうしをかけて2でわつても解けるということになります。このように、大切にしたい言葉はその思考とともに重要です。この他に、「または・あるいは」とか、「ならば・とすると・だったら」「つまり・言い換えると」「全ての……について・いつも」「あてはまる……がある。」などという言葉も重要です。例は割愛しますが、授業の中で、こんな言葉が登場したら注意深く聞き、言葉の使い方を大いに褒めてやったらどうでしょう。きつ

と子どもが何を大切に話を進めればいいのかはつきりわかるのではないのでしょうか。



■坪田 耕三（つばた こうぞう）
教育学者。1947年、東京都生まれ。青山学院大学文学部教育学科卒業。筑波大学附属小学校副校長を務め、筑波大学教授を経て、現在、青山学院大学教育人間科学部教授、早稲田大学非常勤講師。教育出版算数教科書著者。著書に、『算数楽しく 授業術』『算数楽しく ハンス・オン・マス』『算数楽しく オープンエンド』『算数楽しく 問題づくり』『素敵な学級づくり 楽しく・優しく』など多数。

*読者プレゼント
坪田先生のサイン入り著書を3名のかたにプレゼントいたします。応募方法は、P27をご覧ください。

場面の内容や表現の工夫について 読み深めたことを交流しよう

——『暗やみの向こう側』

時津町立鳴北中学校教諭

福岡 知子

一 はじめに

小説や物語など、授業において、文学的文章を読むことが好きな生徒は多い。しかし、ストーリーを追うことで興味が完結し、物語の展開や表現の工夫、人物描写についてじっくり考えながら細部まで読み込む活動になると、繰り返し読むことが不得意であったり、読んでいるうちに飽きてしまったりする生徒も少なくない。

学習指導要領によれば、文学的文章の内容を捉えることについては、小学校第五学年および第六学年で「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」「C(1)エ」を既に学んでいる。しかし、一年生は、中学校に入学して同じスタートラインに立っているように見えるが、

文章読解力については、かなり個人差があるのも事実である。

本教材は、地上と地中のできごとが別々に描かれながら、最後は場面がつながるといふ工夫された構成であること、「そいつ」で始まる登場人物の正体が最後に明かされること、そうした構成や人物描写の手がかりとなる言葉や表現が、文章中に巧みにちりばめられていることなど、生徒がさまざまな部分に着目しながら、興味をもって読むことのできる小説教材である。中学校の国語学習で初めて出会う小説でもあるので、言葉を手がかりに丁寧に読み深めることや、繰り返し読むことで新たな発見があることなど、小説を読む楽しさを全生徒が体感できる学習活動にしたいと考えた。

そこで、グループごとに担当する場面を決め、人物描写や場面設定、言葉の意味や文章表現の特徴について調べたり話し合ったりしたことを交流する「読み取り発表会」を行うこととした。

なお、小学校の既習事項をふまえ、本教材において、第一学年の指導事項である「場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。」「C(1)ウ」を中心に、「比喩や反復などの表現の技法について理解すること。」「伝(イ)才」についてもあわせて指導する。

二 学習計画（全六時間）

(1) 教材の目標（生徒に提示したもの）

場面の展開の仕方や人物の描かれ方、文章表現の工夫に注目して内容を捉え、「読み取り発表会」をしよう。

(2) 学習課題（生徒に提示したもの）

第一時 本文を読み、感想を書く。小説の三要素（登場人物・背景・事件）を確認し、小説のあらましを捉える。本教材の学習課題および学習の流れを確認する。

※語句の意味調べは予習しておく。

第二時 初発の感想を読み合う。文章構成を確認する。「読み取り発表会」のグループ活動を前に、個人で学習する。

第三・四時 「読み取り発表会」に向けてグループで話し合う。

第五・六時 「読み取り発表会」を行う。学習記録をまとめる。

三 授業の実際

(1) 初発の感想から

「地中と地上の話が最後に一つになる展開がおもしろかった。」

「蛇の正体を最後まで明かさないうで、そいつは何なんだ？」と思わせるところがうまいと思った。」

「卵が割れる表現を『花が咲いたよう』と表現していた。」

「地上の親子から見るとコンクリートだが、地下のそいつから見ると蓋というように、立場や見方で言葉が変わっていた。」

どれも、教師からの説明は一切ない段階での一読後の感想である。このように、場面構成、文章表現、使われる言葉の意味を瞬時に読み取ることのできる生徒が、各グループのリーダーとなれば、細部まで読み深められるのではないかと思いい、この初発の感想を手がかりにグループを編成した。（一グループ三、四名）

(2) グループでの話し合いの内容（生徒に提示したもの）

◎班ごとに、割り当てられた場面を、次の項目にしたがって細部まで読み込み、話し合いながらまとめて、クラスのみんなに伝えよう。

1 場面の内容について

①登場人物（人物描写）……行動・会話からわかる性格や人物像など。

②どんな場面か。（場面設定）……時・場所・何をしようとしているのか、など。

2 文章表現の特徴について

①わからない言葉の意味

②言葉や表現の特徴……どんな感じがするか。何を表しているのか、など。

3 場面の絵

4 場面にふさわしい朗読の工夫

①読み方の工夫

（大きく・小さく・ゆっくり・速く・繰り返し・全員で・男子の声で・女子の声で、など）

②役割分担・練習

話し合いの内容や活動が多岐にわたるため、小説としては短いものであるが、あえて八場面に分けて、一グループで読み込む分

量を少なく設定した。約二時間のグループ活動であったが、前時に個人で読み取る時間を設定したため、グループでは個人の学習内容をもち寄って交流し、もう一度、全員で丁寧に場面を読みながら、補足・確認していく様子が見られた。言葉の意味や表現技法を辞書や資料集で確認する生徒、話し合ったことをまとめ直す生徒など、グループのリーダーを中心に、役割分担しながら話し合いを進めていた。場面の絵は、絵の得意な生徒を中心に話し合いと同時進行で行っていたが、授業内に仕上がらず、発表会までに仕上げてくるグループもあった。

(3) 発表の手順（生徒に提示したもの）

◎役割を分担して発表しよう。	
○司会（グループ発表の進行）	〔 〕
1 音読（最初に場面の音読を一人で行う）	〔 〕
2 場面の内容について（人物↓場面）	〔 〕
※説明と同時に絵を見せる。最後に絵の説明をする。	
3 表現の特徴について（言葉↓表現）	〔 〕
4 工夫したグループ朗読	〔 全員 〕

発表台本は特に準備せず、手順のみ生徒に示した。発表を聞く時は、発表内容をまとめた各グループの原稿を、事前に全生徒に配付し、各グループのよい点や質問・疑問をメモしながら行わせた。

資料1 発表原稿例（生徒の原稿より一部抜粋）

場面（1）	P 26 L 3 ～ P 27 L 13	班員
1 場面の内容について		
①登場人物（人物描写） 行動・会話からわかる性格や人物像。		
○そいつ（蛇）		
・行動▼ゆっくり眠っていた。はつきり目覚めていない。		
冬眠に慣れているからあわてていない。一人きり。		
・性格▼マイペース・のんびり・落ち着いている。		
②どんな場面か。（場面設定） 時・場所・何をしようとしているか。		
○時……冬から春（雪解け後）		
○場所……土の中（真っ暗・冷たい・寒い・黒い土・静か）		
↓しばらくぶりにみる「世の中」		
○冬眠から目覚めて地上へ出よう（春に会いにいこう）としている。		
2 文章表現の特徴について		
①わからない語句の意味		
・とぐる……蛇などが体をうず巻き状にぐるぐる巻くこと		
・むろん……言うまでもなく ・もってこい……ぴったり合う		
・石くれ……石のかたまり（くれ＝かたまり）		
②言葉や表現の特徴 どんな感じがするか。何を表しているか。		
・擬態語が多い……「そろりそろり……」「そろそろ」「ぎゅちり」		
・（ ）はそいつのひとりごと。		
・「体で何かの音を聞きつけた」「体のほうから目を覚ましていた」		
↓はつきり目覚めていない。頭はぼんやりしている様子。		



(4) 発表の様子

発表は一グループ七分、感想や意見の交流を合わせて十分程度の予定で始めたが、発表を聞いていた生徒たちから、発表後の感想や評価以外に、言葉や表現に関する質問や課題に対する新たな発見などの意見があいついだため、むしろそちらのほうに時間を費やした。中には発表者が慌てて調べ直し、再度発表するという場面もあった。中には発表者が慌てて調べ直し、再度発表するという場面もあった。時間はかかったものの、活発な意見の交流によって読み取りが深まったことはうれしい誤算であった。それは、グループの事前学習で、一つ一つの言葉に注意しながら丁寧に読み込んでいった経験が、発表を聞く際にも生かされていたからではないかと思う。グループ発表冒頭の音読を聞きながら、多くの生徒がマーカーで言葉をチェックしながら聞いていた。場面を細かく分けたために、小説全体を捉える視点が欠落し、一部分しか読みが深まらないのではな

いかという当初の懸念が払拭されるものであった。

最後の「深まった読み」を生かした朗読の工夫には課題が残った。活動を盛り込みすぎたことがその一因であると思われる。しかしながら、擬態語の部分を強調して全員で読んだり、「そいつ」の心の中の思いとナレーション部分の読み分けをしたりするなど、考えた読みを発表するグループもあった。

四 終わりに

「いろいろな表現（比喩・擬態語）がたくさんあったり、よく読まないところがない文章がいくつもあったりして、その意味がわかるとおもしろくなってきました。小説は、あまり繰り返し読みたくないの、わからないところがあつたら何度も読み直してみたいです。」

「この小説は、場面の変わり方がおもしろかった。また、『そいつ』という言葉のつかい方や『（ ）』『……』などの記号、比喩などの表現技法が多く、小説をおもしろくしていた。これらを生かして読めば、他の物語も楽しめると思った。」（生徒の学習記録から）

グループでの読み取りや発表会での交流をとおして、文学的文章を読み深めることが得意でない生徒も、他の生徒の考えを参考にしながら楽しんで学習できたのではないかと思う。しかし、一人一人の読みの力を向上させるには、さらに教材の特徴を生かした指導の工夫が必要であるということを感じた。

『平家物語』による単元の設定

——「扇的」「敦盛の最期」の

二つの場面を対比した読み

平川市立平賀西中学校教諭

館山 たてやま
知昭 しちあき

一 はじめに

現行学習指導要領で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設定された。これまでも長きにわたってさまざまな古典教材の指導法が考えられてきたが、この事項の設定を機に、これまでの自身の古典指導を見直し、学習指導要領に沿った指導法を行いたいと考え、実践した結果をまとめたのが本稿である。

これまでの自身の指導法を振り返ると、果たして古典作品のすばらしさを伝えられるような指導ができていたか疑問であり、教師主導の講義型の授業ではなかったかと反省している。現行学習指導要領では、「古典に一層親しむ態度の育成」が重視されているため、古典に親しむ態度を育成できるような指導法を模索した。

今回は、現代に生きる生徒の価値観との比較から古人のものの見方や考え方にふれさせたいと考え、対象を第二学年とし、教材を『平家物語』とした。そのため、学習指導要領第二学年「伝アア」・「イ」と関連させて「C(1)イ・エ」を扱った。

また、これまで、課題に対して自分なりの考えを書き、それを「ペア学習」を基本とした交流活動によって、思考の深化を図るための授業を行ってきた。この単元でも多くの意見を交流させたいと考え、「A(1)オ」、「B(1)イ・オ」をふまえて、基本的な言語活動としている。

二 単元の目標

本単元では、『平家物語』の登場人物の生きざまにふれ、「武士とはどのような人たちか」を、現代に生きる自分と比較し、考えることをとおして、古典に親しむ態度を育成すべく単元を設定した。具体的な目標は次のとおりである。

【国語への関心・意欲・態度】

・「武士とはどのような人たちか」について考えながら作品を読むことができる。

【読むこと】

・登場人物の心情や行動から、作品に表れているものの見方や考え方について、自分の価値観と比較し、考えをもつことができる。

【言語についての知識・理解・技能】

・「和漢混淆文」の特徴を生かして朗読することができる。

三 教材観

『伝え合う言葉 中学国語2』では、『平家物語』から「敦盛最期」の場面が取り上げられている。今回は、複数の場面・人物を対比し、武士の生きざまについて考えさせたいと思いい、補充教材として掲載されている「扇的」も加え、単元を設定した。また、「扇的」の場面は吉川英治『新・平家物語』版も収められているため、同場面の内容理解の助けとして活用した。

新たな指導法の試みとして留意したことは、語釈に重きをおかず、登場人物の心情に迫る学習を中心にしたことである。そのため、発問を工夫し、現代語訳（語注）から読み取らせ、原文で解答させるといったかたちをとった。あくまでも原文の表現によって古典に親しませたいと考えたからである。学習の展開としては、戦の順番とは異なるが、「扇的」の学習後、「敦盛の最期」を扱った。

■「扇的」

この場面は、『平家物語』の「那須与一」と「弓流」の冒頭から構成されている。前半は与一の華々しい武勇が描かれているものの、（教科書では未収録部分であるが）義経の命令を一旦は辞退したことで義経を激怒させ、やむなく射ることを覚悟したり、悪条件の中、失敗したら自害せざるをえない状況におかれたりなど、その立場におかれた人間の悲壮感が描かれている。一方で「弓流」の場面では、老武士を躊躇なく射殺すなど、武士の非情さが描かれている。その対比により、武士とはどのような人たちなのかを考えさせた。

■「敦盛の最期」

この場面では、源氏方である直実が若武者の命を助けたいと苦悶する姿や、平家もつ優雅さの中にも、気高く潔い若武者が描かれるなど、「扇的」の場面で見られる武士の姿とはまた異なる人物たちが描かれている。直実の変化を強調するため、夜半、軍を離れ息子小次郎とともに先陣を競うエピソード（「一二之懸」）も示し、功に逸る人物であることを強調させた。また、そこから若武者に呼びかける行動につながることや、若武者の装束・武具の描写の場面も名調子であるため、教科書では現代語で示されている「戦破れにければ……」からの原文テキストも提示した。

以上の二つの場面について、登場人物の心情を読み取る発問を中心に学習するとともに、次に示したようなワークシートに記入し、比較することで武士とはどのような人たちなのかを考えさせた。

その他、場面場面で繰り返し音読し、『平家物語』の特徴の一つである「和漢混淆文」が醸す、美しく、力強いリズムに慣れることで、各場面の雰囲気を感じられるように意識した。

〈対比表のワークシートと主な生徒の記入例〉

ワークシートには質問、発問は記入せず、発問のたびに、そのつど記入させた。ワークシートとその主な記入例とを、次ページに示した。

「武士とはどのような人たちか」(生徒の主な記述は後述)	まとめ		敦盛の最期		まとめ		扇の的		源氏			
	「源氏の武士」				「源氏の武士」		弓流	那須与一				
	「平家の武士」				「平家の武士」							
	<ul style="list-style-type: none"> 立派な武士と戦うことで名をあげる。ことが名誉。 武士が嫌になった。 	<ul style="list-style-type: none"> 身分が高い、優雅(服装や馬、笛など)。 潔い、立派だ。 	<ul style="list-style-type: none"> 名のある武士と戦いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 若武者を救いたい。 発心の思い。 	<ul style="list-style-type: none"> 立派な服装。 深く引き返してきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲームに命を懸けて挑んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 与一は命令で何の迷いもなく射殺す。 	<ul style="list-style-type: none"> 命令には逆らえない。 ゲームなのに必死だ。 名誉、葛藤、覚悟。 失敗したら自害。 	<ul style="list-style-type: none"> 負け戦の最中なのに、余裕がありすぎる。 緊張感がない。 敵なのに褒めたたえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 戦の最中なのにゲームをさせる余裕。 	<ul style="list-style-type: none"> 老武士が気分よく踊り出したが射殺される。 	<ul style="list-style-type: none"> 負け戦の最中なのに、余裕がありすぎる。

四 学習計画(全六時間)

【第一次】(二時間)

- 「祇園精舎」の学習

【第二次】(四時間)

- 「扇の的」「敦盛の最期」の学習

【第三次】(二時間)

- 「扇の的」「敦盛の最期」の登場人物の整理
- 「武士とはどのような人たちか」についての検討

五 授業の展開と実際

【第一次】

- 『平家物語』の概要と時代背景の説明(プレゼンソフトを使用)
- 「平曲」の説明(「祇園精舎」の琵琶弾き語りの映像を提示)
- 「武士とはどのような人たちか」のイメージの確認
- 〈例〉「まげ、刀、鎧・兜、戦う人たち、人を殺す」など
- 単元の目標の提示と学習過程の確認

【第二次】

1 「扇の的」

①「那須与一」の学習

- 内容のおおまかな確認(吉川英治版『新・平家物語』を使用)
- 補助発問
 - ・「矢を射る与一を苦しめたものは何か。」
 - ・「矢を射る時に与一が強く願ったことは何か。」など

○主発問と生徒の意見例

・「筆者はこの場面で何を最も描きたかったのか。」

〔例〕「与一の弓矢の腕のすばらしさ、敵味方関係なくすばらしいものを褒めたたえる武士たち、苦しくても何かをやり遂げようとする与一の勇敢さ。」など

②「弓流（冒頭部分）」の学習

○主発問と生徒の意見例

・「筆者はなぜこの場面を加えたのか。」

〔例〕「武士の非情さを描きたかった、武士は命令によって人殺しをしなければならぬ、平家の武士の優柔さ。」など

○発展課題（条件作文） *相互評価まで行う。

・「源氏方の武士として、与一の行動について、『あ、射たり。』、『情けなし。』のどちらかの立場に立って作文を書く。」

2 「敦盛の最期」の学習

○この場面に至るまでの概要説明

○補助発問

・「若武者に呼びかけた時、直実はどんな気持ちであったか。」

・「直実の若武者に対する言葉づかいはどんな気持ちがかめられているか。」

・「若武者は、なぜ直実に対して名乗らなかつたのか。」など

○主発問と生徒の意見例

・「なぜ直実の発心の思いがすすんだのか。」

〔例〕「自分の息子ほどの若武者をやむなく殺さなければならず、

このような立派な若者でありながら殺さなければならぬ武士というものが嫌になつたから。」など

【第三次】

○主題の確認・追究

・「これまでの学習を振り返り、『武士とはどのような人たちか』について考え、ワークシートに記入する。」

○交流活動

・「ペア学習後、全体で意見を交流し、主題に対する意見を共有する。」

〈生徒の意見から〉

・命令で人を殺さなければならぬのはつらいと思う。
・父親が子どもを思う気持ちは現代と同じだと思う。
・武士たちは命令であれば人を殺さなければならないという
のは現代では考えられない。でも、会社でも上司の命令にはさからえないこともあると思うので、武士と現代の自分たちと同じところもあるのかもしれない。

六 最後に

今回のような、複数の教材を用いてさまざまな価値観を比較し、意見を交流するオープンエンド型の授業形態は、古典に親しむ態度の育成に有効であったと考える。今後、その他の古典教材においても、古典に親しむ態度を育成するための指導法を模索したい。

さまざまな表現の方法を生かして書く

文化祭のクラス発表「映画」の フライヤーを作ろう

—— 広告の機能と表現様式を生かして
効果的に書く

千葉大学教育学部附属中学校教諭

荒川 あらかわ

恵美 えみ

一 はじめに

中学生にとっての「知識基盤社会」を生きる力の育成と考えたときに、日常生活の中の情報媒体であるテレビCMや新聞・雑誌の広告など、また、それらに見られるさまざまなキャッチコピーは、最適な国語科の学習材になると考えた。より「実の場」で言語を運用できる能力を身につけることをねらいとし、この数年間でさまざまな「広告を書く」単元の開発に取り組んできた。各種メディアの特性を生かしたコピー作りの授業とおして、生徒個々の思考力を幅広いものとし、判断力を高めていくことができると考えている。

「書くこと」の学習活動として、レトリックを使ったキャッチコ

ピー作りや、適切な言葉による映画のフライヤー作りをおして、豊かな表現力を育てる授業を行ってきたが、中学校学習指導要領の国語の「書くこと」の言語活動例には、コピー作りはどの学年にも登場しない。しかし、レトリックの効果があるキャッチコピーは、短い言葉でも聞き手や読み手の記憶に残るのが特色であるため、書く力を育てるのに有効であるといえる。

本単元では、中学二年生が文化祭当日の会場に置く、自分たちの学級の自作映画三本を宣伝する三枚のフライヤー作りを学習活動とした。これにより、中学校学習指導要領第二学年「書くこと」領域の「事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。」「B(1)ウ」の指導を具現化しようとした。フライヤーという具体物には、学年は異なるが、第一学年の「図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。」「B(2)イ」や「行事等の案内や報告をする文章を書くこと。」「B(2)ウ」、第三学年の「目的に応じて様々な文章などを集めて、工夫して編集すること。」「B(2)イ」の言語活動例の要素があると考えられる。また、第二学年の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること。」「伝イ(イ)」と「相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。」「伝イ(オ)」という「言葉の特徴やきまりに関する事項」に関連するところでもある。

二 授業計画

本単元の授業を次のように計画した。

(1) 単元の目標

・ 広告を作るという言語活動をとおして、フライヤーに使われているキャッチコピーや見出しのレトリックの効果に、興味や関心をもとうとする。
(国語への関心・意欲・態度)

・ フライヤーの機能や表現様式を知り、レイアウトを考え、戦略的に「作品名」「キャッチコピー」「ジャンルのわかる内容一行紹介文」「ストーリー」「見どころ」「人物相関図」などを効果的に書くことができる。
(書く能力)

・ レトリックの効果を理解し、表現したい内容や目的、意図に沿った戦略に合うキャッチコピーや見出しを作ることができる。
(言語についての知識・理解・技能)

(2) 学習計画(全八時間)

準備学習として、およそ二週間、実際にフライヤーを集め、その目的を考え、さまざまなタイプを知る。また、フライヤー作りに必要な画像を撮影しておく。

第一次(二時間) 単元の学習活動とねらいを意識し、フライヤーを作るために必要な表現様式を知り、見通しをもつ。

○「映画制作企画書」を書き、自分たちが作ろうとしている映画の内容や企画意図を改めて考える。

○実際のフライヤーを集めて読み比べ、付箋を使って分析し、

その特徴や広告としての機能について気づく。

○ 授業者が収集し用意したワークシート【映画四〇作品のキャッチコピー・一行紹介文・見出し一覧】を比較して読み、

【レトリック分類例】に照らして語彙や表現の様式を学ぶ。

○ フライヤーを制作するために必要な既習内容をあげ、見通しをもつ。

第二次(四時間) フライヤーの原案を準備する。

○ 戦略的なフライヤーを制作するためのコンセプトを話し合い、フライヤーのレイアウトについて考える。

○ 「ジャンルのわかる内容一行紹介文」を決める。

○ 映画を宣伝するのに効果的な「キャッチコピー」を、レトリックを使って書く。

○ 「キャッチコピー」を読み比べ、採用する候補作を決定する。

○ 「ストーリー」と「見どころ」で表現したい内容・構成について決める。

○ 【映画フライヤーの語彙六〇〇】を参考に、「ストーリー」「見どころ」を書く。

○ 複数できあがった文章や言葉を比較し、一つの作品を選択し決定する。

第三次(二時間) 原案をもとに、フライヤーをパワーポイントで制作し、広告を作るために必要な言語機能や様式について、学習したことを振り返る。

○ レイアウトに基づき、効果的に文章と画像を入れ込む。

○背景に貼り付けるコピー内容に合う画像、字体、フォント、色などの視覚的な効果について考え、修正をする。

三 授業の実際

フライヤーは見る楽しみと読む楽しみの両面の機能をあわせもつ。今回は、書かせたい項目として、「作品名」「キャッチコピー」「ジャンルのわかる内容」「紹介文」「ストーリー」「見どころ」「その他（人物相関図・登場人物紹介・スタッフ紹介）」「基本情報」などをあげ、サイズをA3判の両面・二つ折り（A4が四半分）とし、効果的なレイアウトを自由に発想するように生徒に話し合わせ、内容を決定させた。

そして、第二次のはじめに、「売り込め！ 映画戦略企画書」とともに、モデル作品の実物フライヤーを二種類用意し、ゴールの形を提示した。皇帝ペンギンのヒナが一人前に育っていく過程をドキュメンタリー映画にしたものであり、タイトルは「ペン吉のはじめの一步」である。そして、異なるコンセプトを設定した場合に、同じ映画でも、どのようにキャッチコピーが違うものになるのかを示すため、モデル作品Aは「日頃の生活で妥協しがちな人に、まず踏み出す勇気の一步を！」、Bは「育ててくれた家族を見つめ直し、あなたがどうの思いを！」というコンセプトを立てて、次のキャッチコピーを提示した。今回は十一のレトリックを、ワークシート【レトリック分類例】として提示し、コピーにはその中から、いくつつかを使用した。それが次のへゝである。

A
<ul style="list-style-type: none"> ・とっても小さい大きな勇気 きつと、あなたもその一步が踏み出せるはずです。 ・ためらっていること、踏み出せないでいること、ありませんか。 <p>〈撞着法〉〈共感・参加促進法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まさかの急展開！ 一体、ペン吉はどうやってその危機を回避したか？ <p>〈共感・参加促進法〉〈対句法〉 〈体言止め〉〈共感・参加促進法〉</p>

B
<ul style="list-style-type: none"> ・キミの成長に出会ったら、心が優しくなれました。 <p>〈共感・参加促進法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思い出してみてください。あなたをいつも包み込んでくれたいたのは、誰ですか。 <p>〈共感・参加促進法〉〈倒置法〉〈命令法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あなたは、「世界でもっとも過酷な子育てをする鳥」と呼ばれる理由を知っていますか？ <p>〈共感・参加促進法〉</p>

ここでいう〈共感・参加促進法〉とは、授業者が名付けたものである。ソーシャルメディア時代の新しいモデルとしてS (sympathize=共感)・I (identity=確認)・P (participate=参加)・S (share & spread=共有・拡散)で表される広告宣伝に対する消費者の心理のプロセスであって、実際のフライヤーに多く見られ、観る者の参加を促したり、問いかけたりするコピーであると解釈できるとある。

次の二つは、実際の生徒の作品である。

「退屈な日々を、楽しい日々」

「この秋、九つの色のはじける・飛ぶ・混じり合う!? 行き着く色は黒か、それとも虹色か。」

違うジャンルのこれらの映画に対して、前者には「日常と非日常の対義語を入れてはどうか。」という提案が、後者には「登場人物の九人のキャラクターのカラーがよく表れていてよい。」という意見が生徒から出され、その他には、レイアウト面を指摘する「ページをめくったときの効果を考慮すると、読み手の興味を持続させるにはここここは逆のほうがよいのではないか。」という意見も出された。友達との交流をとおして、生徒たちは作品にさらに修正を加えていった。

また、「ストーリー」の文章には、人々に映画を観たいという気持ちにさせるための工夫が必要とされる。あらすじをどこまで要約し、どの点を意図的に残し、結末を暗示させるように書けばいいのか、この点を戦略的に書かせることが重要である。そして、「見どころ」には、訴求したいテーマや、人物と事件や出来事の関係性、撮影の工夫、映像効果、音響効果などをまとめさせたい。そこで、ワークシート【映画フライヤーの語彙六〇〇】を用意し、三本の映画①アクション・パフォーマンズ、②青春もの、③ファンタジー)にそれぞれ使えそうな語彙と、映画特有の語彙のうち、「制作者側からの見どころ(映像・音楽)」「評価する言葉・こだわりの点」などに分類したものを提示して、さらなる語彙力の向上をねらった。

四 おわりに

平成十九年度の全国学力・学習状況調査「中学校国語B」の第三問の出題は、広告文を書くときに必要な、ターゲットへの意識と表現意図を読み取る力が試された設問であった。

つまり、授業者が目的的に作った実生活に生きてはたらくような場や、課題解決をしていくような場の中でこそ、生徒は実生活の中で必要に応じて活用できる知識や技能を身につけられると考える。

また、今回のフライヤー制作にはパソコンを、発表の場面には実物投影機を用いた。メディアを扱い、制作することをとおして、レトリックの効果を実感し、生活に使ってみたいという意欲を喚起するとともに、広告を批判的に読み解く視点を得させることができたかと考えている。



国語科におけるメディア教育の意義

兵庫教育大学准教授 羽田 潤はだ じゅん

一 はじめに

連載の第二回では、第一学年の『写真と言葉が生み出す世界—メディアリテラシー入門』の中から、①「詩のギャラリーへようこそ」を取り上げ、写真を使った新たな詩の読解学習について、第三回では、第二学年のメディア学習で行う「ごんぎつね」の読解を取り上げ、言語表現を映像表現に変換する読解学習の方法について、第四回では、第三学年の、『情報を編集するしかけ—メディアにひそむ意図』を取り上げ、「報道」の疑似制作体験という言語活動の方法について、第五回では、再び、②「言葉と写真のかかわりを楽しむ」を取り上げ、説明的文章と写真（非連続型テキスト）との効果的な組み合わせについて、第六回では、「ごんぎつね」の「絵コンテを読む」を取り上げ、絵コンテを読んだり書いたりすることの国語科としての意味について述べてきた。今回は、教科書の学習活動から少し離れ、映像版「ごんぎつね」の広告ポスターを作る、という学習活動について報告する。

二 映像化手法で「ごんぎつね」を読む

——「映像版『ごんぎつね』の広告ポスターを考えよう」の概要
前回取り上げた「ごんぎつね」の「絵コンテ」化という映像化手法を、別のアプローチから行えないかと考えたのが、今回の広告ポスター制作である。当初は、新聞一面広告制作を考えたのだが、新聞広

告の場合は、上映日、上映館、煽り文句、観客の声、批評家の声といった、新聞特性（日時特性）に応じた情報が付与され、広告としての量・質ともに複雑化し、授業内で理解表現活動を行うには時間がかかる。そこで、広告ポスターという、情報量が限定された媒体を選択した。学習展開（学習活動）は次のとおりである。

第一時（九十分）

- ① 「ごんぎつね」の映像化作品を企画し、そのための広告ポスターを制作することを知る。
- ② 「広告ポスター」のモデルとして、スタジオジブリ作品の広告ポスターを数点比較し、共通する要素として、「タイトル」、「制作会社・監督」、「メインビジュアル」、「キャッチコピー」で構成されていることを知る。
- ③ 「ごんぎつね」を読み、映像版「ごんぎつね」の「売り・特徴」を考え、班の中で話し合う。（ワークシートAの間）
- ④ 先の活動をふまえ、広告シートに、「タイトル」、「制作会社・監督」、「メインビジュアル」、「キャッチコピー」を書きこみ、工夫した点をワークシートに記入する。
- ⑤ 作品を班の中で相互評価し、評価の観点を見いだす。

第二時（九十分）

① 前時に制作した映像版「ごんぎつね」の広告ポスターを三つの観点で評価し、優れたポスターを選び出す。

※三つの観点

- ・ キャッチコピー点……作品の「見せたい部分」が効果的に表現されているか。
- ・ ポスター点……メインビジュアルとキャッチコピー（その他の文字情報）は効果的に関わっているか。
- ・ ワークシートA点……ワークシートには考えが明確に表現されているか。
- ② 個人で評価したあと、班の中で話し合い、一作品を選ぶ。
- ③ 各班の結果を聞き、改めて個人で一作品を選ぶ。

三 スタジオジブリの広告ポスターを読む

広告ポスターのモデルとして使用したのが、スタジオジブリのものである。スタジオジブリ作品は、宣伝活動の出発点として、広告ポスターを制作し、作品のイメージを広く世間に伝えるという手法をとっている。どのポスターも映画を見る前にどこかで目にしており、宣伝活動に寄与する役割は大きい。今回モデルとして取り上げたのは、『風の谷のナウシカ』（一九八四）、『天空の城ラピュタ』（一九八六）、『となりのトトロ』（一九八八）、『火垂るの墓』（一九八八）、『もののけ姫』（一九九七）、『千と千尋の神隠し』（二〇〇一）などである。これら広告ポスターの共通要素として、「タイトル」、「制作会社・監督」、「キャッチコピー」といった文字情報、「メインビジュアル」という視覚情報が抽出できることを確認した。なかでも「キャッチコ

ピー」と「メインビジュアル」は、作品の特徴を伝える要素として、選びぬかれたものであることを認識した。例えば、『となりのトトロ』と『火垂るの墓』では、「忘れものを、届けにきました。」という共通のキャッチコピーのもと、メインキャスト二名が正面向きにレイアウトされている共通するビジュアルで、同時上映であることを打ち出している。しかしながら、『となりのトトロ』は、「このへんないきものは、まだ日本にいます。たぶん。」、「火垂るの墓」では、「四歳と十四歳で、生きようと思った。」と、それぞれの作品の中で生きるキャラクターの特性の違いを端的に言い表している。特に、『火垂るの墓』のキャッチコピーは、作品のエンディングを予感させる悲哀を含み込み、作品を端的に表現しながらも何が起るのかを見届けたいとの思いを生じさせるキャッチコピーである。

このように、広告ポスターには、作品を売るためにどのような工夫やしかけがあるのかを学習したうえで、映像版「ごんぎつね」の広告ポスター制作に向かった。

四 広告ポスターを制作する

学習活動は「ワークシートA」に基づき、十班に分かれて行った。「1 あなたのイメージする映像版『ごんぎつね』はどのような作品ですか？ 『売り・特徴』は何ですか？ 言葉で説明してみましょう。」を書き込み、班の中で話し合いながら、自分の広告ポスターのイメージを固め、実際の制作活動に入っていった。

制作後は、ワークシートA「3 他の人の広告ポスターを見ましよう。印象に残った広告がありましたか？ それはなぜでしょうか？ 自分と他の人は何が違っていましたか？」に基づき、班の中で交流を行っている。

五 広告ポスターを評価する

次時では、提出された三十三作品を対象に、評価シートを用いて、班の中で一位を決め、それを教室内で共有し、改めて個人でいちばんよかったものを考える、という活動を設定した。

なお、各班が選んだ一位は次のとおりである。

○二、四、五班が選んだ作品（あなたに届けたい……）」

メインビジュアルは兵十とそれを振り返って見るごんである。間に置かれているのは、ごんが兵十に届けていた栗や松茸。物語の実際の場面ではなく、二人の関係性をイメージとして表現している。観客の視線がごんに寄り添うように、キャッチコピー「あなたに届けたい……」がごんの上にレイアウトされている。



ワークシートA

映像版「ごんぎつね」の広告ポスターを考えよう

氏名()

○映像版「ごんぎつね」が制作され、その広告ポスターを制作することになりました。広告ポスターに必要なのは、「タイトル」、「制作会社・監督」、「メインビジュアル」、「キャッチコピー」の4点です。

1. あなたのイメージする映像版「ごんぎつね」はどのような作品ですか？「現行・特徴」は何ですか？言葉で説明してみよう。

新美南吉の代表作であり、新美南吉の異なるものは分かり合えないというテーマが最もよく表されている作品。兵十とごんは似通った境遇でありながら互いを分かり合えない宿命であり、相手のことに気づくのが遅く、とり返しのきかない状況になる。最後に分かり合えたときの悲しくも、よめたという感覚が魅力である。ごんの改心にも注目である。

2. あなたのイメージする映像版に基づき、広告シートに、「タイトル」、「制作会社・監督」、「メインビジュアル」、「キャッチコピー」を書き込みましょう。工夫した点はどこですか？

ごんと兵十が最後の最後まで分かり合えない、すれ違いを表現できるように、あえて兵十を後ろ向きにごんと対照的に、間に文字を入れました。昔からある語を強調させるために、あえてた書きで古風にしました。

3. 他の人の広告ポスターを見ましよう。印象に残った広告がありましたか？それはなぜでしょうか？自分と他の人の何が違っていましたか？

みんな見るたびに感じとしてほしいことが違い、それによってメインビジュアルもいろいろとおもしろかったです。ごんぎつねの分かり合える、分かり合えないという解釈が人によって異なるので、キャッチコピーやメインビジュアルも異なるのだと思います。Mさんの伝承を意図したポスターがとても心がほっとする感じで、すごいと思いました。

○広告ポスターを評価する。

1. 映像版「ごんぎつね」の広告ポスターを評価しましょう。

①まずは、個人で、ベスト5を選びましょう。各観点10点満点×3で30点満点(15分)

・キャッチコピー点：作品の「見たい部分」が効果的に表現されているか。
 ・ポスター画点：メインビジュアルとキャッチコピー（その他の文字情報）は効果的に関わっているか。
 ・ワークシートA点：ワークシートには書き手が留意して書かれているか。

作品番号	キャッチコピー点	ポスター画点	ワークシートA点	合計点(30点満点)	コメント
⑦	8	10	4	22	ポスターの絵の遠近法を用いていることから、ごんと兵十の距離感も感じられた。また、つづきの叙情的な場面とキャッチコピーが合っている。
②5	8	9	9	26	居家のなかに置かれた栗と松茸の、もの寂しくて、キャッチコピーとも合っていると思った。
⑫	7	8	9	24	ごんと兵十がすれ違っていることが表現されているので、キャッチコピーは理解し合えたという心が届かれています。絶妙なバランスにイラストをあてたもので、よくあるごんぎつねの絵のようではないと思いました。
⑭	8	7	7	22	
⑳	7	8	6	21	物語についてはあまり分からないような、絵とキャッチコピーが見る人を引きこめる感じが良いと思いました。

②次に、グループ(4人)を作り、話し合っ、ベスト1を決めましょう。その際、それぞれが選んだベスト5を踏まえましょう。

※話し合いの過程をメモしましょう。

7: 文字・絵から、物語が伝わってくる。
 9: キャッチコピーがよい。
 10: なんでも伝わる感じ。2人の距離感がgood
 12: キャッチコピーとごんの表情がよく合っている。すれ違いが上手に表現。
 16: 興味をかくよくまとまっている。
 17: 伝承に注目する感想
 19: ごんの孤独。見るだけで十分な。
 20: 人間が入りきらない感じがよい。
 21: ごんの一生懸命さ
 25: 物語の感じよく表している。
 27: 3: 切り返し。
 29: 人間が入りきらない感じがよい。
 ※グループの結論をメモしましょう。理由も書きましょう。代表を決めて発表の準備をしましょう。

⑫ メインビジュアルの兵十とごんを見つめる表情の切なさと、キャッチコピーとごんの表情がよく合っている。すれ違いが上手に表現されている。

選んだ班からのコメントは次のとおりである。

・ごんが兵十を想っている様子とそれに気づかない兵十が上手に表現されている。見た人も同じ想いをもつことができる。キャッチコピーもとてもよい。

・「すれちがい」をうまく表現。

・この映画を見たいと思わせる。

・背景を何色にするのか気になる。

・キャッチコピーと絵がしっかりとかみあっている。

・メインビジュアルで、兵十を見つめるごんの切なさ、すれ違っている様子がよい。キャッチコピーもとても合っている。

○一班が選んだ作品（「ごめんよ。」）

製作者によると、「ごめんよ。」は、ごんの言葉である。選んだ班は、兵十の言葉と捉えていた。メインビジュアルの奥にごんの姿を描いている。部屋の中からの視点であるため、兵十の視点と捉えた学生が多かったが、実際には兵十がそのようにごんを見つめる場面はない。



選んだ班からのコメントは次のとおりである。

・さみしい感じが描かれていてキャッチコピーと合っている。他の作品と視点が違い、兵十の目線になることができる。

○三班が選んだ作品（「はじまりは、小さいいたずらからでした。」）

兵十の全身を描かないことで、ごんの思いに焦点化したポスター。キャッチコピーはジブリふうでもあり、学習を生かしているといえる。



選んだ班からのコメントは次のとおりである。

・ごんの目線で、下からのアングルで書いてあるのがおもしろい。
・先が気になり、見たくなるようなキャッチコピー。

○六班が選んだ作品（「一人でいいと思ってた。」）

本文冒頭の「ごんは、独りぼっちの小ぎつねで、しだのいっばい茂った森の中に、穴を掘って住んでいました。」を視覚化し、兵十のうなぎにいたずらする前の時間を描く。



選んだ班からのコメントは次のとおりである。
 ・意図にあったキャッチコピー。「思ってた」の部分に今は違うんだという意味がくみとれる。

なお、作品世界を象徴する彼岸花をメインビジュアルに選んだ「この罪は許されますか…」をキャッチコピーとした広告ポスターが他のポスターとは違うアプローチをしているものとして授業内で紹介した。

六 まとめ

「ごんぎつね」を読み直す手法として、映像版「ごんぎつね」の広告ポスターの制作を行った。「ごんぎつね」そのものを紹介するのではなく、映像版の広告ポスターとすることで、「ごんぎつね」の「売り」や「宣伝」を意識させ、自らの「ごんぎつね」の読みの客観化や、他者の読みを意識させることができたことが、ワークシートの振り返りからも確認できた。広告ポスターの制作・評価をとおして、学生らは、「ごんぎつね」とはどういう作品なのかを班の中で議論し、それに適した広告ポスターとは何かを考え続けた。

メインビジュアルを考える際の基本的な考え方は、どの場面を視覚



化するのかという点であった。前回の「絵コンテ化」が、冒頭をどこから始めるのか、どのように映像化するのかという観点であったのに対し、今回の広告ポスターは、観客に「見たい」と思わせるメインビジュアルを一点考えるというアプローチになる。いずれも「ごんぎつね」の重要な場面を視覚化（映像化）するという意味で共通するが、「絵コンテ化」が、「本文↓映像化」の二段階であるのに対し、「広告ポスター」は、「本文↓映像化↓広告ポスター」の三段階の過程を内包する。質的な難しさは広告ポスターのほうにあるが、学習者にとつて身近なものは、広告ポスターであろう。映像化手法を組み合わせることで、本文読解につながる活発な言語活動が仕組めると考える。

注 本実践は、日本国語教育学会第三十八回西日本集会京都大会ワークショップ「メディア・リテラシー―映像化手法で『ごんぎつね』を読み直す」(栗野志保、羽田潤、松山雅子)、第七十六回国語教育全国大会ワークショップ分科会「メディアを活用した国語の授業づくり」(羽田潤、松山雅子)をふまえ、兵庫教育大学学部三年生三十九名を対象に羽田が行った授業である。

参考文献 スタジオジブリ責任編集「ナウシカの『新聞広告』」って見たことありますか。——ジブリの新聞広告十八年史」(徳間書店、二〇〇二年)

言葉から考え方を考える

接続表現は論理の要

茨城大学教育学部准教授 鈴木 一史

一 はじめに

「言葉から考え方を考える」の連載の最後にあたって、今回は、接続表現と論理の関係について考えていきたい。文と文を結ぶ時、その結び方は接続詞だけではない。学習者は、さまざまな接続表現を使って、文と文の関係、段落と段落の関係をつないでいく。そのことが、論理語彙として機能し、論理を形づくっていくことにつながる。それでは、どのような接続表現が論理を作っていくことになるのか。前回「しかし」を中心とした「反対」の表現について、学習者がどのようなに使用しているか、また教科書本文にはどのように出てきたのかを確認した。そこで今回は、「しかし」も含めた接続表現という大きな枠組みで文と文の関係性、段落どうしとの関係性を考えながら、論理に迫ってみたい。

前回示した教科書教材である、第二学年の「書くこと」の全過程教材『立場を決めて意見を述べるには』に、副題として「根拠を明確にした意見文」と書かれている。「根拠を明確にする」には、どのような論理語彙が含まれているのだろうか。教材の一部に、「根拠をあげて論理的に考えるための方法」として「三角ロジック」が示されている。その論理的な組み立ての例として、「意見・主張」が「だから、今の若い人たちは子どもっぽくなっている。」「根拠となるデータ・体験例」

が「例えば、電車やバスの中で、通勤途中の若い人が、携帯ゲームで熱心に遊んでいるところを見かける。」であり、「解釈・考察」が「そのことは、通勤途中にもかかわらず、子どもが遊ぶようなものに夢中になっていることを意味する。」と、このような論理構成があげられている。さて、ここで問題となるのは、「例えば」という表現である。「例えば」は品詞でいえば接続詞ではなく副詞であるが、論理の構成を考えるための接続表現としてなくてはならないものである。そこで、このような接続表現が教科書教材にどのようにちりばめられているのか、確認していく。

二 教科書の中の接続表現と「例えば」

まず前述の「例えば」である。第一学年の教材である『私の好きな春の言葉』には、

……言葉によって日本人は、自然の豊かさを、さらに美しいものにしてきたようだ。

例えば、「花曇り」という言葉がある。桜が咲く頃の、曇りがちの天気を表している。
(教科書P12L5～7)

という文がある。さて、この「例えば」は文の中でどのような役割を担っているのだろうか。それは、「日本人が言葉によって自然の豊かさをさらに美しいものにしてきた」という主張に対して、「例えば」を使って「根拠」をあげている。

また、同じ第一学年の教材である『花の形に秘められたふしぎ』にも、次のようなところで「例えば」が使われている。

……例えば、オオバスノキやシヤジクソウのグラフを見ると、他の花よりもハナバチの仲間が多く訪れていることがわかる。

(教科書P17L15～18)

この文は、「……訪れる昆虫の種類に偏りが見られた花が、たくさんあることがわかるだろう。」という文の次の一文であり、やはり、自分の考えや主張に対しての「根拠」になっていることがわかる。

このように、「例えば」という接続表現は、一年生の時から、教科書教材の本文の中にちりばめられ、その機能性を十分に発揮してきている。したがって、授業でこの接続表現を意識して取り組むことで、学習者の中には、「例えば」が根拠を表しうることは十分に潜在能力として、身につけているはずである。そこで、第二学年の「書くこと」の全過程において、この論理構成を学ぶことによって、今までに習得してきたことが、活用できるように変容していくことになる。その契機としても、これらの学習材は活用したい。

三 教科書の中の接続表現「だから」「……に対して」

第三学年の「書くこと」の教材に、『文章の形態を選択して書くに

は——広告を批評する——』がある。ここでは、その学習内容について記述することは省くが、その教材の中に、「文の形式」の例として、「Aは……である。それに対して、Bは……である。」と「だから、私はA(B)のほうが効果的だと考える。」という二つの「文の形式」をあげ、それを使った例文が示されている。この二つの言葉についても、教科書の読み教材の中でどのように学習してきたかを振り返ってみる。「……に対して」は、たびたび引用した第二学年の『ガイアの知性』には、

……この「攻撃的な知性」をあまりにも進歩させてきた結果として、人間は環境破壊を起こし、地球全体の生命を危機に陥れている。これに対して、鯨や象のもつ「知性」は、いわば「受容的な知性」とでも呼べるものだ。

(教科書P94L10～13)

と出てくる。「……に対して」という言葉が、一方とは別の概念や考えをさし示すときに使われる典型的な例といってもよいだろう。

さらに、同じ第二学年の教材である『学ぶ力』にも、

……まだ何も書いてないところに、白い紙に黒々と墨の跡を残すように、どんなこともどんどん吸収するような、学ぶ側の「無垢さ」、師の教えることはなんでも受け入れますという「開放性」、それが「師をその気にさせる」ための力であり、弟子の構えです。たとえ、書物の中の実際に会うことができない師に対して、この関係は同様です。

(教科書P134L6～10)

と出てくる。ここでは、AとBの関係が同様の関係性をもつこと为例として、「対して」が用いられている。Aの内容がBでも使えることを示すときに、「対して」が用いられるのである。このように三年生で学習する「……に對して」は、読み教材の中でやはり習得されてきているはずである。

次に「だから」であるが、これは「……に對して」以上に学年をまたいで教材の中で繰り返し使われている。論理を学習する教材にもなっている、第一学年の教材である『自分の頭で考える?』には、次のような表現がある。

いろいろな考えの人たちがいる。だから、私たちはそれぞれ自分で考えなければいけない。しかし、自分で考えているだけでは、いろいろな考えの人たちがいるということもわからない。だから、自分と違う考えの人たちと出会わなければいけない。

(教科書P94L19～P95L1)

この文章では、「だから」と「しかし」が連続して使われている。この筆者の論理展開をきちんと読み解いていくためにこそ、「だから」や「しかし」という言葉に十分に注意を払って読んでいくことが必要である。また、そのことが三年生になって自分でこれらの言葉を使って表現をしていくときに、まるで伏流水のように有効にはたらいてくるのである。

このように、教科書教材には「話すこと・聞くこと」や「書くこと」はもちろんであるが、「読むこと」の教材においても学習すべき接続表現がちりばめられているのである。そして、「読むこと」の教材に

において、接続表現を確実に学習することが、学習者の論理的な思考を徐々に形づくることになる。

四 接続表現どうしの関係

それでは、学習者は接続表現を使うとき、どのような思考方法をしているのだろうか。「言葉から考え方を考える」の最後として、学習者がどのような考え方をしているかを言葉によって捉え、その言葉はどのような思考の過程をたどらせる力を含んでいるかを考えていきたい。学習者の意見文の作文例を分析すると、接続表現どうしの関係性が浮かび上がってくる。ある言葉を用いる学習者は、もう一つのある言葉を用いる傾向にあることがわかる。これを「言葉の共起性」という。接続表現どうしても全く関係なく使われている言葉もあれば、関係性をもって使われる言葉もある。

例えば、「まず」と「次に」などは共起性をもっている典型である。この二つの言葉は、互いに関係性をもち、「まず」を使う学習者は「次に」も使う傾向にある。この二つは、学習材などにおいても取り上げられ、「話すこと・聞くこと」の教材においても、話す内容の順番や、内容の数の提示などが指導されているため、「まず」と「次に」が関係して出てくることはさほど不思議ではない。

ところが、「しかし」と関係のある言葉として「なぜなら」がある。関係性は弱いだが、統計的には無関係といえない。前回、「しかし」という逆接表現が、反対の意見も想定する必要性を含んでおり、「しかし」は小学校で習う言葉ではあるが、高校生になってから使用頻度が伸びるという傾向にあり、表現語彙としては難しい言葉であることを示した。そして共起関係を調べることで、「しかし」という言葉を使うと

きには、「なぜなら」という、自分の主張に対する根拠や理由を説明したり、疑問や問いかけを設定しそれに応えるかたちで論を進めていったりするという、高度な論理展開をしていることがわかってきた。さらに、「なぜなら」と関係の深い言葉は、「ところで」と「けれども」である。「ところで」は「話題転換」であるが、単なる話題を変えるという意味以上の役割を意見文の中で担っている。一つの意見文の中で、この二つをともに使うということは、話題を転換し、なおかつ、それをまとめるように論を展開するということであり、これはなかなか難しい論理構成をもつ文章といえる。「なぜなら」と「ところで」を使うことによって、問題提起された複線的な文章の構成が一つにまとまってくる様子が浮かび上がる。

また、「けれども」は逆接であることから、自分の主張に対する反対意見や主張が成立するための条件などを勘案している様子もうかがえる。このように、接続表現の一つ一つは論理の要であり、論理を組み立てようとするときには、接続表現が欠かせない。実際の授業では、接続表現そのものを言葉の学習として教えることがある。しかしそれは、学習者の中に論理の道筋を作ることであり、決して、言葉の形だけを指導していることにはならない。教科書教材に見られるように、「文の形式」や「三角ロジック」などの学習では、使用する言葉が例示されているが、これは、「型」そのものではなく、ある型にあてはまる文型や文体を学ぶことで、この型の中にある思考方法そのものを学ぶことになるのである。それが言葉から考え方を学ぶことになるのである。

五 おわりに

平成十六年二月三日の文化審議会によって出された答申の「これか

らの時代に求められる国語力について」の中の「Ⅱ これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について」の「第一 国語力を身に付けるための国語教育の在り方」に、「情緒力・論理的思考力・語彙力の育成を」として、次のような記述がある。

……人間の思考は言葉を用いる以上、その人間の所有する語彙の範囲を超えられるものではない。情緒力と論理的思考力を根底で支えるのが語彙力である。
(文部科学省ホームページより)

数学や理科の化学式は絶対の解をもちうるが、社会にあるさまざまな問題はそのような統一的な「解」はない。だとすれば、このような絶対の「解」をもちえないかもしれないことを議論していくことがこれからの時代や社会で必要とされる能力の一つである。また、三段論法のような「論理」は、そのことに対する議論が生まれにくいという点で、数学的な論理の世界かもしれない。そうではない議論が今の「知識基盤社会」では有用視されていく。しかし、解がないかもしれないからといって、議論を放棄したのでは何も生み出さない。また、議論をするときに論理的に考えるときは、自分勝手な「考えの方法」では、対立を生むばかりである。そこで、国語科教育として担うべき能力の伸長としては、考える方法を言葉によって涵養することではないだろうか。もの考えるときには言葉を用いて考えていく。その用いるべき核となる言葉を身につけさせて、社会に送り出したい。

*連載「言葉から考え方を考える」は、本号をもって終了いたします。ご愛読ください。まことにありがとうございます。

書写学習における原理・原則の理解を図り、
日常化を深める書写教育のあり方

八幡平市立西根中学校教諭

勝部 かつべ明美 あけみ

はじめに

昨年度、「第四十四回東北書写書道研究大会岩手（盛岡）大会」で授業をさせていたたく機会に恵まれた。

大会主題は「日常生活に生きる力を育成する書写・書道教育」である。また、中学校は「書写学習における原理・原則の理解を図り、日常化を深める書写教育のあり方」を主題として、大会は行われた。その主題に迫るために、以下のような実践を行った。

実践事例①【部活動の決意

——書体を選んで、文字の大きさと配列に気をつけて書こう】

中学校学習指導要領第2学年の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、書写に関する事項として「イ 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと。」が示されている。

本単元では、生徒一人一人が部活動の決意として掲げた言葉を教材として扱った。一年生で学習した楷書や行書の書き方を踏まえ、課題設定・自己批評・相互批評をとおして決意を書き上げた。また、書き上げた決意を見せながら、決意発表会も行った。

1 目標

文字の大きさや紙面に対する調和のとり方を考慮しながら、配列よく書くことができる。

2 授業の構想

(1) 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】

これまで学習してきた書き方を振り返り、筆記用具と書体を選んで書こうとしている。

【言語についての知識・理解・技能】

文字の大きさや紙面に対する調和のとり方を考慮しながら、配列よく書いている。

(2) 単元の指導計画（45時間）

①部活動の決意を書く。筆記用具と書体を選ぶ。 1時間

②自分で決めた筆記用具と書体で、試書する。…1時間

③試書した作品を相互批評し、それを生かして

練習し、まとめ書きをする。……………1時間（本時）

④消しゴム印を作る。……………0.5時間

⑤成果物を見せながら、決意発表会を行う。……………1時間（国語）

3 授業の実際

(1) 基準理解のさせ方

・紙面に対して右や左に寄っている例

・文字が小さすぎる例

・文字の大きさが崩れている例

・平仮名が漢字の行書と調和していない例

・紙面に対して文の区切りがよくない例

・字形が整っていない例

・太さがさまざまな例

を提示し、①中心、②大きさ、③平仮名と漢字の大きさ、④行書と平仮名の調和、⑤配列、⑥字形、⑦太さの基準を理解させた。

(2) 批正・練習のさせ方

・四人グループでそれぞれの成果物に対するアドバイスを書き合
い、それをもとに個人の目標を決めた。

・練習する中で、用紙や筆記用具の変更も認めて、よりよい用紙
の大きさと筆記用具を定めた。

・試書とまとめ書きとを比べて、個々の目標に達していたか自己
評価した。

4 授業の考察

・十分な練習時間を確保するためには、前時に試書をして基準理
解をするところまで入れたほうがよかった。

・基準理解は小学校での既習を踏まえて、本時の指導事項に絞っ
たほうがよかった。

・相互批正の前に自己批正の時間があるとよかったのではない
か。本時、四人グループでの相互批正を行ったが、ペアで行
うほうがより深く時間をかけて批正をすることができるので
はないか。

・まとめ書き→振り返り→評価をし、日常に生かすことを
意識させることが大切である。

実践事例②【お礼の気持ちを届けよう】

——行書と仮名を調和させて書くこと——

中学校学習指導要領の第2学年では、「伝統的な言語文化と国語
の特質に関する事項」における書写に関する事項として「ア 漢字
の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く
書くこと。」が示されている。

本単元では、十月に行われた宿泊研修でお世話になった方への礼
状を教材として扱い、これまでの学習を踏まえ「行書とそれに調和
した仮名を読みやすく書く」ことを、指導の重点とした。また、行
書は速く書くために有効な書体である。この行書の特徴をおさえる
ことはもちろんのこと、字形を確認し、他の文字も行書で書くこと
ができる力を身につけさせたかった。さらに、礼状は読み手を意識
して「読みやすく」書く必要がある。そのどちらも、今後の生徒の
日常生活に生かされていくものと考えた。

1 目標 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、
書くことができる。

2 授業の構想

(1) 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】

これまで学習してきた書き方を振り返り、漢字の行書とそれに調
和した仮名を書くこととしている。

【言語についての知識・理解・技能】

漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して書いている。

(2) 単元の指導計画（5時間）

①学習の流れを知る。本文の文章を考える。……1時間(国語)

②はがきの表面と本文の試書。……1時間

③試書をもとに自己目標を設定。表面の練習とまとめ書き。……1時間

……1時間

④試書をもとに自己目標を設定。本文の練習。……1時間

⑤本文のまとめ書き。学習の振り返り。……1時間(本時)

3 授業の実際

(1) 授業の流れ

・学習課題の把握

・基準を確認して、本時の自己目標を設定する。自己目標をグループのメンバーに伝え、まとめ書きのためのアドバイスを書いてもらう。

・まとめ書き

時間を計り、「速く書く」ことも意識させる。

・評価

試書とまとめ書きを比較して、自己評価を行う。また、グループで相互評価を行う。さらに、全体の場で発表させ、共有する。

(2) 基準理解のさせ方

・授業が始まる前に、パワーポイントを用いて、行書と仮名が調和している例とそうでない例を見せ、調和するとはどういうことなのかを目で確認した。

・授業の中では、再度、行書と仮名を調和させるポイントを言葉で確認した。さらに、行書と仮名を調和させるポイントを書

〈まとめ書きの様子〉



いた紙板書を掲示した。

・行書と仮名の調和以外の配列などの基準(「部活動の決意」の際に用いた紙板書)も掲示し、生徒が見て確認できるようにした。

4 生徒の感想

・行書で漢字だけを書くのは簡単だが、仮名と調和させるのはとても難しかった。それもはがきに書くので、失敗は許されなと思うととても大変だった。でも、練習していくうちにだんだん慣れて、少しすら書けるようになってうれしかった。

・今回の学習で、相手に感謝の気持ちをもって書けば、相手にもその気持ち伝わるかもしれないと感じた。もし、自分が受け取ったらやはりうれしい気持ちになる。逆に「ありがとう」という気持ちになるだろう。はがきや手紙を送る時は、手書きで気持ちを込めて、美しい行書で書きたいと改めて感じた。

おわりに

手書きは気持ちを伝えるための手段の一つである。そして、手書きだからこそ伝わる気持ちがある。生徒達は書写の授業をとおして、実際に文字の書き方によって伝わる思いの強さや弱さを体感してきた。また、思いを伝えるための工夫もしてきた。そういう思考と経験を積み重ねていくことで、手書き文字の必要性和重要性も生徒達に浸透していくものと考えられる。そのことが、書写の学習で学んだ原理・原則の理解を図り、日常化を深めることにもつながるのではないだろうか。これからも、手書きの素晴らしさを伝えられるような、書写の授業実践を考えていきたい。

読者プレゼントのお知らせ

坪田耕三先生の直筆サイン入りの著書『算数的思考法』を抽選で三名のかたにプレゼントいたします。

郵便はがきに、お名前、ご住所を明記のうえ、左の宛先までお送りください。（締切は、二〇一四年五月末日消印有効。）

発表は発送をもってかえさせていただきます。なお、お寄せいただきました個人情報は、プレゼントの発送にのみ使用させていただきます。

〒一〇一〇〇五二 東京都千代田区神田神保町二一〇

教育出版株式会社 国語編集部

「道標」二〇一四年春号プレゼント係

表紙絵

今号の表紙絵は、モモ（桃）。バラ科の落葉小高木で、春に五弁、または多弁の花を咲かせます。

桃は、古くから和歌に詠まれてきました。ここでは、一首を紹介したいと思います。

春の苑その 紅くれないにほふ 桃の花 下照くだる道に 出で立つ娘むすめ子

（『万葉集』巻第十九 四一三九）

【歌意】

春の苑は紅に輝いている。その紅の桃の花が照り映える樹下の道に、たたずむおとめよ。



「書く」力をつける



監修 大熊 徹
代表編者 細川太輔 井上陽童 石井健介
B5判 180 ページ 本体 2,200 円+税

学習指導要領に示された言語活動例を取り上げながら、これらをとおしてどのように「書く」力をつけるのかを、具体的な活動とともに示します。

世界は言語でできている



著者 丹藤博文
A5判 240 ページ
本体 2,400 円+税

ストーリーを追うだけの文学教育から脱却するには？ 『少年の日の思い出』『走れメロス』『故郷』『言葉の力』などを取り上げ、そのヒントを紹介します。

中学国語通信 道標 (2014年 春(第28)号) 2014年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光
発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- | | | |
|-------|-----------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 北海道支社 | 〒060-0003 | 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509 |
| 函館営業所 | 〒040-0011 | 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198 |
| 東北支社 | 〒980-0014 | 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395 |
| 中部支社 | 〒460-0011 | 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825 |
| 関西支社 | 〒541-0056 | 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401 |
| 中国支社 | 〒730-0051 | 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040 |
| 四国支社 | 〒790-0004 | 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134 |
| 九州支社 | 〒812-0007 | 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140 |
| 沖縄営業所 | 〒901-0155 | 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411 |